ミュージアムコレクション 16

まつりに使われた子持勾玉

●コレクション・データ

時　　代　古墳時代
調　　査　唐古・鍵遺跡第 38 次調査
発 見 年　1989 年
大 き さ　長さ 6.5 ㎝、重さ 67.5g
展示位置　第 3 室 「田原本のあゆみ」

勾玉は、日本では縄文時代に出現し、特にヒスイ製の勾玉は、弥生時代から古墳時代を通じて貴重な装身具として扱われました。勾玉には、時代や材質によってさまざまな形態のものがあります。今回紹介するのは、古墳時代中ごろに作られた「子持勾玉」です。

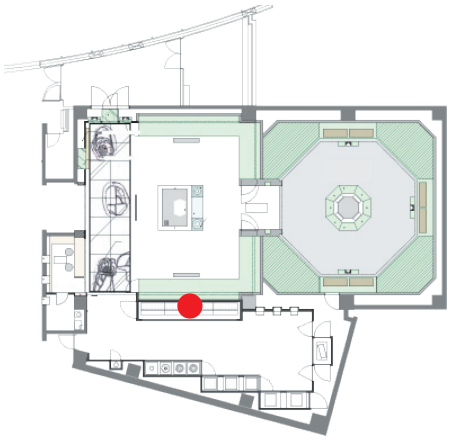
子持勾玉とは、大型の勾玉の表面に勾玉状の小さな突起があるもので、滑石や碧玉で作られています。このような子持勾玉は、5世紀中ごろに出現し、7世紀まで作られました。唐古・鍵遺跡出土の子持勾玉は滑石製で、腹面に1つ、背面と両側面におのおの3つの合計10個の突起が見られます。勾玉の横断面は厚く、重厚感があり、子持勾玉として初期の形態を示しています。

ところで、子持勾玉の用途をめぐっては、考古学界で長らく論争が続いてきました。江戸時代の国学者である谷川士清は、これを「太古の剣頭」とし、石剣の柄頭と考えました。こうした説は、『雲根志』を著した木内石亭や、藤貞幹らに受け継がれ、江戸時代にはT字形に装着する柄頭とされていました。

子持勾玉を、初めて勾玉の一種と考えたのは神田孝平で、明治時代に入ってからのことでした。その後も、子持勾玉が魚の形を真似たとする考えや、銅鐸の鰭との関連性を指摘する考えなどさまざまな説がありました。しかし、子持勾玉の上端部に見られる穴が、勾玉の穴に一致することから、現在では、勾玉の一種とするのが一般的です。

子持勾玉は、集落遺跡から出土することが多く、アクセサリーとして古墳に副葬されるヒスイ製の勾玉とは性格が異なります。この特異な形態から、玉のもつ霊力と増殖に関連する呪術に使われたのではないかと考えられています。

このように、玉に対して何らかの霊力を認めるのは原始も現代も変わりないのです。



ミュージアム上面図と展示位置